

何故日本語は曖昧だと思われるのか（3）

—時制¹⁾からの一考察—

Why Is it Thought Japanese Is Vague ?

—An Examination of Tense and Aspect—

周 国龍*

Guo Long ZHOU

提 要

本文主要对日语的时态「ル形」、「タ形」和「テイル形」、「テイタ形」,「だ」和「だった」所具有的语法意义和在各种具体场合中的句义作一分析。从分析中得知,如果只是单纯理解了日语各种时态的语法意义、往往还不能准确理解在各种场景的句子中的具体意思。这样,在具体运用中就容易产生误解和误用。笔者认为在具体运用中不能准确理解和运用,是日语学习者会觉得日语表现暧昧的原因之一。

キーワード: 時制 文法的意味 文脈と場面 表現の意味 理解力

0. はじめに

日本語の文法形式には時制²⁾の対立がある。助動詞「だ」に対し、「だった」があり、動詞には「ル形」、「タ形」と「テイル形」、「テイタ形」といった時制の対立が存在している。文法的な意味においてこれらの対立は未来の行為か過去の行為か、現在進行中の行為か過去のある期間中の状態かに分けられている。

日本語の動詞は「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第四種の動詞」と分類されている³⁾。そのうちの継続動詞と瞬間動詞⁴⁾において「ル形」、「テイル形」、「タ形」といった文法形式は同じであってもその文法的な意味が違い、表現における意味も異なる。

*本学教授 対照言語学 (Contrastive Linguistics)

1. 彼は水を飲む。 2. 彼は水を飲んでいる。 3. 彼は水を飲んだ。
4. 彼は結婚する。 5. 彼は結婚している。 6. 彼は結婚した。

「飲む」は継続動詞で、「結婚する」は瞬間動詞である。同じ「ル形」、「テイル形」、「タ形」ではあるが、継続動詞と瞬間動詞においてそれぞれ文法的な意味は微妙に異なっている。「ル形」、「テイル形」、「タ形」の文法的な意味の説明だけではこれらの意味の違いを正確に理解することができるとは言えない。

また、「夢追い酒」という歌がある。その歌詞に、

7. 死ぬまで一緒に信じてた
わたし馬鹿です 馬鹿でした
あなたなぜなぜ 私を捨てた
指をからめ 眠った幸せを
思い出させる 流し唄

との一節があり、「馬鹿です、馬鹿でした」は「ダ形」と「ダッタ形」を用いて反復されている。ここにも時制の対立が存在する。文法的な意味でその区別を言うならば「現在形」と「過去形」だと説明することになるであろう。しかし、この場合においてこのような解釈だけでは恐らく歌詞の意味を十分に理解できるとは言えないであろう。

日本語文法形式の文法的な意味を習得しただけでは日本語の表現の意味の微妙な違いを理解できたとは限らない。「ル形」、「テイル形」と「タ形」、断定を表す助動詞「だ」、「だった」といった時制の対立があつて、表現において表す意味は大変複雑なようである。そのため、日本語学習者にとっては、文法的な意味を解釈することができるだけでは日本語の表現の意味を正確にとらえているとは言えず、場合によっては理解の不十分さが原因で誤解と誤用を犯してしまう可能性があることも十分考えられる。そこから生じた困惑は日本語が曖昧だと思わせる一因になっていると考えられる。このような戸惑いを無くすために、これらの表現の時制についてもう少し細かく分析し、日本語の文法形式による表現の微妙な意味の違いを正確に把握できるようにする必要がある。

本稿は主に継続動詞と瞬間動詞における「ル形」、「タ形」、「テイル形」及び「ダ形」と「ダッタ形」についての時制の対立、さらに「テイタ形」という文法形式からその背後にあるそれぞれの表現の意味の違いを分析し、学習者の母語との関連もあろうが、難解の原因を探り、日本語が曖昧だと思わせる原因を極力取り除きたい。

1. 継続動詞について

まず、「継続動詞」について考えてみたい。

継続動詞は「ル形」、「タ形」、「テイル形」にすることができる。

8. 彼は水を飲む。
9. 彼は水を飲んだ。
10. 彼は水を飲んでいる。

文法形式からその文法的な意味を言えば、例 8 は主に習慣的に或いは未来に遂行される行為、例 9 は過去の時点で遂行された行為、また例 10 は現在進行中の行為を表す。時制の方に焦点を当てて言えばそうであろうが、このような動詞の対象となる目的語の違いに焦点を当ててみれば表現に意味の微妙な違いをもたらすようである。

11. 彼は水を飲んでいる。
12. 彼は薬を飲んでいる。

同じ動詞「飲む」の現在進行形だから、文脈なしで両方とも行為が現在進行中で今まさに「飲む」行為を遂行していると理解して差し支えないであろう。しかし、「テイル形」は繰り返す行為を表すことも可能である。かといって、両方とも同じく繰り返す行為を表すことができるかというと、必ずしもそうではないようである。「テイル形」は具体的で、ある期間に限って繰り返す行為を表すという意味を有する。このような文脈的な意味の有無から考えれば、例 12 の「薬」はその性格上、ある期間に限り繰り返し「飲む」行為と解釈されやすい。だが、例 11 の「水」の場合、「水を飲む」は通常日常的に繰り返されるような習慣的な行為と認識されやすく、ある期間に限って繰り返すような行為とは連想されにくい。このため、例 11 は正に現在進行中の行為と理解されやすく、例 12 は繰り返す行為と理解されやすくなるわけである。医者は患者に「今何か薬を飲んでいますか」を確認することはよくあろうが、普通「今水を飲んでいますか」とあまり聞かないのもそのためであろう。

13. 彼は手紙を書いている。
14. 彼は論文を書いている。

常識的に考えれば手紙を書くのにそれ程時間がかかるものではないため、正に現在進行中の行為と理解されるのが普通であろうが、論文となると短時間で終わらない可能性が高くなる分、ある期間中に書き続けるという意味に解釈されやすい。だから、正に現在目の前で「書いている」という現在進行中の行為と理解されうるだけではなく、論文が完成するまでのある期間中において「書く」という行為が続くという意味の理解も可能になる。一方、例 13 はそう理解される可能性はかなり低いであろう。

このように、継続動詞の「テイル形」は基本的に現在進行中の行為を表す文法形式であるが、行為の対象となる目的語の意味により現在進行中だけではなく、ある期間中に繰り返しながら同じ行為が継続されることを表すこともある。同じ「テイル形」であっても、表現の意味は微妙に変わるわけである。⁵⁾

以上、同じ「テイル形」の場合において、目的語の意味により「テイル形」の表す表現の意味に大きく変わる可能性があり、目的語の意味範疇が変われば、同じ「テイル形」であっても表す意味が変わり、そのため表現全体の意味も変わるということについて見てきた。次は文脈の中で「ル形」と「テイル形」の使い分けが端的に現れるような例をあげてみる。

15. 私は毎日大学に行きます。

16. 私は毎日大学に行っています。

文脈なしでは「ル形」でも、「テイル形」でも習慣的な行為に使われることができる。しかし、同じ習慣的な行為を表すとはいえ、文脈により「ル形」か「テイル形」かに区別して使わなければならない場合がある。

17. 留学生センターの留学生たちは月曜日から金曜日まで、毎日 8 時 40 分までに大学に
来ます。そして日本語の授業を 3 時まで受講します。3 時以降は自由です。

? 18A. 先生、お元気ですか。私も元気で、毎日大学に行きます。

18B. 先生、お元気ですか。私も元気で、毎日大学に行っています。

例 17 は「留学生センターの学生たちの生活パターンを説明している文章である。話し手は特に誰か具体的な学生のことを意識しているわけではない。また、特に具体的に「いつ」という時を意識しているのではなく、超時間的に述べている。このように「現在形」は超時間的な規則、真理などを述べる文章によく使われる」⁶⁾。一方、「誤った文となるのは、その前に“先生、お元気ですか。”とあるから……、話し手の意識は“今”の“私”の具体的な状況を見ており、それを伝達するのが目的の文である」⁷⁾ から、「ル形」は自然な表現でなくなり、「テイル形」の方が自然な表現になるのである。このように、具体的な状況を意識せずに超時間的に用いられる場面なのか、具体的な時間と状況を意識して用いられる場面なのかによって習慣的な行為に関する「ル形」と「テイル形」は使い分けられなければならない場合もあるわけである。前例の「彼は水を飲んでいる」よりも「彼は薬を飲んでいる」ほうが習慣的な行為と理解されやすい理由もここにあったと考えられる。

「読む」「書く」「走る」等のような継続動詞で、「テイル」にした場合、行為の現在進行中であることを表す。

19. 彼は本を読んでいる。

20. 彼は走っている。

しかし、数量を表す成分を加えると、行為を実行した結果の継続を表すことになる。

21. 彼は本を三冊読んでいる。

22. 彼は50キロ走っている。

例 19、例 20 のように継続動詞の「テイル」は行為の現在進行形を表すが、例 21、例 22 のように数量などを加えるだけで、遂行された行為の結果の継続を表すことになり、表現の意味に変化が見られるわけである。行為の現在進行形は話し手の発話する時点に実行されているのであるが、行為の結果の存続を表す場合、話し手が発話している時に行為自体はすでに完了しその結果が存続していることになる。このように同じ「テイル形」ではあっても表現の意味は大きく異なるわけである。しかも継続動詞のすべてではなく、その一部だけこのような現象が見られるのであるから、余計理解と使用を難しくしているのである。⁸⁾

以上、継続動詞の「ル形」、「テイル形」が用いられた場合において、使われる環境が変われば表現全体の意味も変わるのを見てきた。「ル形」、「テイル形」のような同じ文法形式で、同じ文法的な意味を有するにもかかわらず、具体的な表現における目的語、数量を表す言葉の有無、あるいは文脈によってはその解釈が異なってしまうのだから、学習者が正しく理解し、正しく使用できるまでには時間がかかる難しい文法事項であると言えよう。

2. 瞬間動詞について

瞬間動詞の「タ形」は行為前の状態から行為後の状態に変化したことを表し、「テイル形」は行為後の状態の継続を表す。

23. 風邪を引いた。

24. 風邪を引いている。

例 23 の場合、話し手は風邪を引いていなかった状態から引いた状態に変わった直後だとの認識があった時に用いられる表現であるのに対し、例 24 は発症した直後ではなく、その状態がある程度継続したとの認識があった時に使われる表現である。即ち行為後の状態が継続する段階に入った後に用いられる表現である。「タ」、「テイル」はそれぞれ文法的な意味が異なるわけである。この違いは次の例で検証できる。

25. もう一週間も風邪を引いている。

？26. もう一週間も風邪を引いた。

例 25 の「一週間」は行為後の結果の状態が継続した期間であるため、「テイル」とは共起できるが、一週間もの時間をかけて状態が変化したとは考えられず、例 26 の「タ」とは共起で

きないわけである。

27. 一週間前に風邪を引いた。

? 28. 一週間前に風邪を引いている。

29. 一週間前から風邪を引いている。

? 30. 一週間前から風邪を引いた。

例 27 の「に」は行為の発生した時点を表すため、「タ」と共起してその時点において行為後の状態が変化したことを表すことはできるが、例 28 「テイル」と共起することは難しい。また例 29 の「から」はすでに一週間前から変化した後の状態が継続した期間を表すのだから、「テイル」と共起できるが、「タ」とは共起できないわけである。

瞬間動詞「ル形」はこれから行為が実現されるという意味を表すことは可能である。

31. 彼は来月結婚する。

32. 太郎は来年大学を卒業する。

しかし、継続動詞の「ル形」と違って、繰り返しを含意するというよりも、むしろともすればそうなるという習性があるという意味を表すようである。

33A. このテレビはよく故障する。

? 33B. このテレビは何度も故障する。

34A. 彼はよく風邪を引く。

? 34B. 彼は何度も風邪を引く。

例 33A、例 34A の「よく」は繰り返しの頻度を意味するというよりもそのような習性、性質を有するようになったという意味である。だから、「ル形」と共起でき、極自然な表現である。一方、例 33B、例 34B の「何度も」は繰り返す回数が多いという意味しかないため、「ル形」と共起することが難しく、自然な表現とは言えないわけである。

瞬間動詞「テイル形」は行為後の結果の状態の継続を表す。

35. テレビが壊れている。

36. 彼は結婚している。

「テイル形」は他の成分を加えない限り行為の繰り返しを表すことはできないが、「何度も」といった繰り返しを表す表現が加われば、行為後の結果の状態の繰り返しを表すことは可能になるが、回数ではなく、習性、性質の意味を表す「よく」にはなじまないようである。

37A. このテレビは何度も故障している。

? 37B. このテレビはよく故障している。

38A. 彼は何度も結婚している。

？38B. 彼はよく結婚している。

瞬間動詞の「タ形」は前の状態から今の状態に変化したことを表し、「テイル形」はその変化した後の状態が継続していることを表す。どのような表現形式で表現するかは話し手のこの物事に対する認識によるが、聞き手もまた表現形式から話し手の表現しようとする意味を正確に読み取らなければならない。例えば、

39. 私は結婚しました。

40. 私は結婚しています。

と言ったとする。これを聞いて、通常例 39 はつい最近結婚したと理解し、お祝の言葉を言った方が礼儀にかなうだろうが、例 40 なら結婚はある程度の時間が過ぎ、結婚した状態にあると理解しなければならない。「タ」、「テイル」の使い分けと聞きわけができなければ誤用と誤解が生じ、コミュニケーションの妨げになりかねない。

以上、瞬間動詞の「ル形」、「テイル形」、「タ形」について見てきたが、それぞれ共起する表現の違いがあることがわかり、このような違いをよく理解できなければ誤解と誤用が生じることになる。

3. 「だ」と「だった」について

断定助動詞「ダ」に活用があり、その過去形は「ダッタ」である。「ダ」は主に名詞の後に付き、「間違いないことと判断した意を表す」⁹⁾。また形容動詞の語幹について使われる。「ダ形」は基本的に現在の状態、性質等に対しての判断を表すのに対し、「ダッタ形」は過去の状態、性質などに対しての回想を表すが、文脈によっては状態、性質等の変化を表す場合もあり、また特定のことに對しての判断を表すこともある。

41. 彼は学生です。

42. 彼は学生でした。

例 41 は今学生の身分であるという状態の判断を表す。一方例 42 は過去の状態あるいは回想を表す。これは文脈なしの状況において解釈可能である。次の例も同じように過去の状態だと言えよう。

43. ○○さんが1日、死去した。○○歳だった。

例 43 の場合、「死去した」と文脈で示されているので年齢は過去の状態になり、人間が死亡したから当然で年齢の変化を暗示する可能性はありえないわけである。一方、例 42 の「学生」では性質上、過去の状態を表すと同時に文脈的示唆さえあればその状態からの変化を暗示する場合もありうるわけである。

42'. 彼は学生でしたが、(今は会社員です。)

文脈によりその状態からの変化を更に容易に読み取れる場合もある。

44. 近くに住む主婦(64)によると、3人は十数年前に引っ越してきたという。女性は「(児玉容疑者は)笑顔で挨拶してくれる人。おとなしい兄弟だった」と言葉を失った。(毎日新聞 23. 10. 30)

「おとなしい」児玉容疑者の逮捕により、今までの状態を「ダッタ」で回想したような口調から彼に対する主婦の見方に変化が生じたことが示唆された文である。

45. 従来は、体の細胞を iPS 細胞(人工多能性幹細胞)にいったん変化させてから、改めて必要な細胞に変化させる方法が主体だった。(朝日新聞 2011. 5. 27)

文脈からもわかるように、「従来」と言ったのだから、「主体」は過去のことになり、今は他の方法に変わったと読み取れる。つまり変化が起こったと理解できる。記事も「iPS 抜きで神経細胞 米チームが人の皮膚細胞使い」により成功したという内容である。

「名詞+だ」は現在の状態、「名詞+だった」は過去の回想あるいは状態を表すが、文脈などにより、状態等の変化を示唆する場合もある。形容動詞も現在の状態、過去の状態だけでなく、本質的なものと一時的な出来事と理解できる例も見られる。

46. 彼女は綺麗です。

47. 彼女は綺麗でした。

例 46 は今の状態か、そのような素質の持ち主だという意味であろうが、例 47 は過去の状態の回想そして今は綺麗でなくなったという変化の意味を示唆している。

例 7 であげた「馬鹿です」は自分が馬鹿だという素質の持ち主だと言い、一方、「馬鹿でした」は過去の特定の時期の一時的な状態を指して言う。例 7 では失敗した恋愛について自分が悔しがっている気持ちを表しているのであろう。従って、歌詞の「馬鹿です、馬鹿でした」はレトリックで単純に繰り返すのではなく、言わんとすることは自分が馬鹿だ、その上に今度の恋愛の件もまた馬鹿なことをしてしまったと理解すべきであろう。

このように見てくれば、「ダ」と「ダッタ」の時制の対立は場面、文脈によっては意味の微妙な違いがあることがわかり、学習者にとっては単純な文法的な意味の理解だけでは真の理解までは程遠いものであると言えよう。

4. 「テイタ」について

動詞の「テイタ」は過去の状態を表し、変化があったことを示唆する機能があるという点において、「ダッタ」に通じるものがあるように考えられる。

48. 詐欺容疑で指名手配中だった「当たり屋」を逮捕

49. 長年指名手配されていたマフィア幹部の男が逮捕された。

例 48 の「だった」と例 49 の「ていた」は上記の例からみればその意味はほぼ同じだと言えよう。つまり、「逮捕した」ということから、一定期間に継続していた「手配」の状態より変化が生じたことを意味する。しかし、「ていた」も「ダッタ」と同じように必ずしも状態の変化を意味するものであるとは限らない。

50. 石川被告は 2000 年 11 月、同会の会計事務を前任者から引き継いだ。証拠採用されている引き継ぎ内容をまとめたノートには、収支報告書の作成方法などが箇条書きにされ、末尾に「全体を（小沢）先生に見せる」と記載されていた。（読売新聞 2011 年 10 月 28 日）

「記載されていた」ものは変化が起こるわけがなく、ただ過去の確固たる事実の存在を確認するという意味に使われているであろう。事実、この文脈ではその状態が今も継続しているとして「記載されている」と「テイル形」にしても可能であろう。従って、この場合は過去の状態の確認の意味のみであり、状態の終了と変化といった含意は認められない。

51. ことし 8 月、衆議院のネットワークのサーバーが、外部から不正に侵入を受け、内部の情報にアクセスできる状態になっていたことが分かりました。（NHK ネットニュース 2011.10. 25）

例 51 の「ていた」は発話した時点において過去のある期間にその状態が続いたことがわかっただけで、極端に言えば、この状態が終了したのかどうかは明言していないし、文脈からそのような示唆も読み取れないように思われる。

52. また、金総書記が視察先の江蘇省揚州市で同市出身の江沢民前国家主席と会談したとの観測については「会っていない」と否定したという。中朝の国営メディアは、金総書記と江氏との会談の事実を報じていないが、会談の可能性を指摘する情報がくすぶっていた。

「くすぶっていた」は報道する時点において過去のある時期に続いた状態を表すわけであるが、文脈から「くすぶっていた」内容は「否定した」のだから、「くすぶっていた」状態は終了したと理解してよからう。

53. 両社はそれぞれ 28 日に取締役会を開いて球団売却を正式に決めて、発表する予定だった。た。売却後は、球団名に「モバゲー」を入れる方向で検討を進めていた。しかし、球界の一部から企業名ではない名称が入ることに反発が出ていることから、調整を迫られたとみられる。（朝日新聞 2011 年 10 月 27 日）

例 53 の「予定だった」、「進めていた」は文脈からもわかるように、進める状態は過去のある期間中で続いたが、「反発が出て調整を迫られた」といった文脈から見れば、「予定だった」、「進めていた」は過去の状態だけでなく、これから「売却」の話は中断し、変更するなどの状態に変化したとそう読み取っても差し支えないわけである。

例 7 で別れるまではそう「信じてた」が、別れてからは「信じてた」は過去の状態になり、当然今は信じられなくなった状態に変わったと理解してよからう。

54. 記者会見した田中さんは「今まであきらめてていたものが、これで見えてくる。大きな自信を持って紹介できる」と笑顔で語った。 (産経ニュース 2011. 11. 8)

この文脈で「あきらめていたもの」は過去のある期間継続していたが、今は新しい希望が見えたため、あきらめは過去のものになり、自信に転じたという状態の変化が読み取れる。

このように、「テイタ」は 1. 過去の状態、2. 過去の状態の終了、3. 過去の状態の終了だけでなくその後変化が起きて別の状態になることを表すことが可能である。「テイタ」はどの意味に用いられるかは上記の例からもわかるように、文脈に頼って判断するしか方法がないように思われる。このような意味の微妙な違いを読み取ることは大変難しいことはこれで理解できるであろうと思われる。

5. おわりに

本稿は主に日本語の継続動詞、瞬間動詞の「ル形」、「テイル形」、「タ形」と助動詞「だ」と「だった」の時制の対立からその文法的な意味、そして動詞の「テイタ形」の文法的な意味は具体的な表現においてその意味はどのように解釈されるべきかについて考察してみた。日本語の時制も実際の表現において文脈、場面などによっては表現の表す意味は異なってくる。日本語学習者にとってその文法的な意味を習得しただけでは簡単にこのようなそれぞれの意味の違いを正確に理解し正確に使用できるような文法事項ではない。この意味の微妙な違いは日本語の文法体系によるものとも言える。その理解と運用の難しさが日本語の表現に対する誤解と誤用を引き起こす原因の一つだと考えられる。学習者はこのような誤解と誤用の繰り返しをしているうちに、日本語の表現の意味の微妙な違いの理解に悩まされた末、日本語の表現は曖昧だと思ってしまうようになる可能性が大いにあると考えられる。

日本語の動詞には継続動詞と瞬間動詞の他に、状態動詞もあるがここでは言及されていない。状態動詞には所謂可能表現等も含められる。その文法的な意味、表現の仕方と表現の意味については稿を改めて詳しく考察したい。

注：

注1：本稿は主にそれぞれの表現の意味の違いに焦点を当てて考察する。時制の体系的な考察については参考文献を参照されたい。

注2：本稿ではテンスとアスペクトの区別をせず、時制とする。

注3：町田（1989）を参照されたい。

注4：本稿はまず継続動詞と瞬間動詞について検討してみる。

注5：詳しくは町田（1989）を参照されたい。

注6：坂田雪子編著（2003） pp. 169～170

注7：同上

注8：町田（1989）を参照されたい。

注9：山口明穂他編 （2001） pp. 424～425

参考文献：

- 坂田雪子編著 2003 『日本語運用文法—文法は表現する—』 凡人社
町田 健 1989 『日本語の時制とアスペクト』 アルク
森山卓郎 2000 『ここからはじまる日本語文法』 ひつじ書房
山口明穂他編 2001 『日本語文法大辞典』 明治書院